

地域の安全マップをつくろう！ 南海トラフ地震にそなえる

高知県高知市立三里小学校 福本 誠一

1 はじめに

高知市では、南海トラフ地震について、4年「安全なくらし」の単元で学習するように副読本とカリキュラムが改訂されました。災害と市や地域との関係をまず地図に表し、次に「交通安全・防犯」での学習内容をつけたして「校区の安全マップ」を完成させます。

子どもたちは、地図を作成する活動に興味・関心を抱きます。本稿では、社会科があまり得意でない教員・子どもたちを意識して、地図帳も参考にしながら、地域の安全マップをまとめていく方法について述べます。

2 「安全マップ」を作成する前に

「安全マップ」などの校区の地図をつくるとき、基本となる地図を用意します。まず、校内に校区地図黒板や今までに作成した地図がないかを確認します。また、各市町村の役所では2万5千分の1や2500分の1の地図を、市や県の防災対策関係の部署からは、防災に関する地図や情報を入手しておきます。

南海トラフ地震に対する取り組みとして、高知市では、『高知市 津波避難マップ』（図1）を作成しています。そこには減災対策や避難対策…津波避難ビルや津波避難タワー・津波避難センターなどの避難場所等が記載されているので、これを参考にすると、指導計画も立てやすくなります。指導する側は、完成した「安全マップ」のイメージをもって指導にあたるのが大切です。

地図のつくり方は、『楽しく学ぶ小学生の地図帳』p.83を参考に、社会科と総合学習の時間を使い、目的と実態に合わせて計画します。



図1 『高知市 津波避難マップ No.8 三里（種崎）浦戸小学校区』部分（高知市防災対策部地域防災推進課）

地区ごとに19種類つくり、津波浸水想定区域にかかる小学校区の住民に全戸配付されている。津波の浸水予測範囲と時間、緊急避難場所、避難経路が示されている。

3 「安全マップ」をつくる

最近、環境の変化が激しく予想できないような災害が次々と起きています。「安全マップ」をつくるにあたって、その地域の地形の特徴と、これまでの災害の歴史について学習しておくことをお勧めします。

本校の場合、校舎の北側に大平山があり、南側の目前には太平洋が広がっています。この地域は、約100～150年サイクルで南海トラフの大地震に見舞われ、校区の神社には地震の際の津波のようすを記録した石碑（図2）もあります。

本単元の導入では、同じ地点から撮影した2枚の写真——1946年昭和南海地震の被害前と現在——を比較し、地形の特徴や歴史に興味をもたせます。

そのあと実際に校区を「安全マップ」をつくる目的で、危険な場所、緊急避難場所や避難路、神社の石碑などの過去の被災の遺構を確認しながら歩きます。また、避難施設を見学したり、地域の人に話を聞いたりして、メモや写真をとります。

最後に学校で「安全マップ」に記入して完成させます。

「安全マップ」を作成していく際に大切なことは、誰に何を伝えるのかを意識させて地図を作成することです。地図に施設を記入していく過程では、名前だけでなく位置と数に着目させ授業を行



図2 仁井田神社の石碑

1854年の安政南海地震のとき、数日前から潮がくるいだし、朝小さな津波がきて、その翌日大地震がきて、大津波がきたことが刻まれている。潮の変化や小規模の津波があるときは注意するようにといった戒めを後世に伝えている。



図3 実際に作成した「安全マップ」

うとよいでしょう。本校では「安全マップ」は防犯と防災の視点で作成しています。

防犯は、黄色やピンクなどで枠囲みして人の数、道幅、家の数、時間帯などの視点から、交番等の建物や施設を記入していきます。

防災は水色で表し「減災…津波・土砂崩れ」「避難…津波・避難路」「救助」といった視点で施設等の役割について話し合い、書き込みながら地図を仕上げます。疑問がでたときに確かめる方法として、地域の聞き取りを大切にします。

作成した後は、校内および校区のイベントで発表しています（図3）。

日本は地震大国であり、近い将来南海トラフ地震が高知県を襲うことも十分考えられます。南海トラフ地震については、5年でも地震の多い日本の現状を世界地図を使って学習します。また「県や市はどのような手だてで市民を守ろうとしているのか」を知ることは大切です。それらのこととともに、「自分自身は地震のときにどのような行動で命を守ることができるか」を考えることや実際に避難してみる活動も並行させて繰り返し行うことが大切になります。

「安全マップ」づくりは、知ることだけでなく自分たちはどう行動したらよいか考えるきっかけになりますし、実際に避難するときに役立ちます。そして発表することは、聴いた人にも同じような

効果をもたらすので、ぜひ行ってほしいです。

4 おわりに

私は海岸沿いに位置する本校に赴任してすぐ、東日本大震災の被災地に行ってきました。

山をおりて港に向かう道の途中に、「これより下に家を建てるな」という古い石碑があり、さらに少し下がったところに東日本大震災の津波到達地点の碑が建てられているのを見たときは衝撃的でした。石碑は、被災した人の悲痛な思いを後世に伝えていました。

やはり、学習の基本は人々の営みやものを介することを大切にすることであり、教員自身がまず、「もの」や「人」と接することが教材開発の出発点でありたいと考えています。社会科が苦手な子どもに対しては、「百聞は一見にしかず」、普段、何気なくみている身のまわりの「もの」や「人」を目的意識をもって見直させることが大切です。

また、子どもたちが地図を読み取る力、調べた内容を地図上に表現する力をつけるためには、まず、教科書や地図帳の資料を参考に模倣しながら、地図にするとといった基本的な学習が大切であると思います。地図をつくって学習を進めていくというあたり前の学習が、命を守る、命を助ける学習の基礎でありたいと思います。